

2020年8月9日 礼拝説教要旨

詩編講解説教26「完全な道」

詩編26：1～12、Iヨハネ2：1～2

第26編は、詩人が完全な人間を主張しているように読めます。自分は間違っていない。やましいところはどこにもない。ルカ福音書が伝える譬え話で、自分は正しい人間だとうぬぼれて人を見下しているファリサイ派の人の姿を見ているようです。そういう姿勢はわたしたちの目に傲慢であり、凶々しく写るものです。それよりも自らの罪を認めて、憐れんでくださいとする方が神さまの前に謙虚であり、模範的な信仰者の姿であると言えます。

では、この第26編をどう読んでいけばよいのでしょうか。この詩は具体的な社会に横たわる悪の現実を描いています。(4、5、9、10節) もちろん罪を認め、神さまに赦しを請う姿勢は、大切な信仰者の姿勢だと思いますが、ここではそういう御前における罪の問題を扱っているというよりは、具体的な生活の中で起こる犯罪や社会悪が取り上げられています。またそういう悪に巻き込まれ濡れ衣を着せられるようなことを想定しているかもしれません。例えば、皆さんも身に覚えのないことで誰かから責められたり、疑念を持たれたりすることはないでしょうか。特に仲の良かった人や信頼していた人からそのように見られるのは辛いことです。自分を告発する相手に向かって、「そうじゃない。誤解だ。わたしは悪くない」と主張したくなります。それは当然のことではないでしょうか。

今、インターネット上での誹謗中傷が社会問題になっています。その多くが匿名で無責任な立場で人を悪く言うという非常に悪質なものであります。また誰かが言っていることを鵜呑みにして、それで人を悪く言う。そしてそれが広く拡散していく。被害者は加害者を特定することもできず一人苦しむという非常に理不尽な現実があります。『ハイデルベルク信仰問答』の中にこういう言葉があります。

問112 第九戒では、何が求められていますか。

答 わたしが誰に対しても偽りの証言をせず、誰の言葉をも曲げず、陰口や中傷をする者にならず、誰かを調べもせずに軽率に断罪するようなことに手を貸さないこと。かえって、あらゆる嘘やごまかしを、悪魔の業そのものとして神の激しい御怒りのゆえに遠ざけ、裁判やその他のあらゆる取引においては真理を愛し、正直に語りまた告白すること。さらにまた、わたしの隣人の栄誉と威信とをわたしたちの力の限り守り促進する、ということです。

ここに「誰かを調べもせずに軽率に断罪する」とあります。わたしたちはそういう過ちを犯しやすい。それで傷つき苦しんでいる人は少なくありません。例えば世の中には残念なことに「冤罪」が起こります。人を裁くことはよほど慎重にならなければそういう間違いを必ず犯すものです。そこでもし人は皆罪人だという教理を持ってきて、誰かを断罪するようなことがあるなら、それは少しおかしな話になります。それは乱暴であり、一方的であって、新たな冤罪を作り出してしまふようになるでしょう。わたしたちの生活する社会では、制度上、人を裁く必要があるわけですが、それならば神さまへの恐れと慎重さと謙虚さを持ってする以外にありません。誰かを裁く時に、神さまの御前に立つ恐れがあるでしょうか。その恐れを知っている者でなければ人を裁くことはできないということをわきまえる必要があります。

第26編は「完全な道」という言葉が初めと終わりにあります（1、11）。「完全」というのは何かに一致しているという意味です。何に一致しているのか。「主に信頼して、よろめいたことはありません」（1節）「あなたのまことに従って歩き続けています」（3節）これはまっすぐ神さまに向かっている状態。神さまのまことに一致している生き方。それがこの「完全な道」です。わたしの生き方をその神さまの完全な道に照らしてくださいと詩人は言います。でもその完全な道に照らせば照らすほどわたしたちはその完全から外れていると認めなければなりません。ではこの詩人は自分の正しさをどこに見出しているのでしょうか。

6節に「わたしは手を洗って潔白を示し」とあります。ここで思い起こすのが、主イエスが死刑の判決を受ける時に、主イエスを裁く立場にあったピラトは群衆の前で手を洗って「この人の血について、わたしには責任がない」（マタイ27：24）と言ったところでした。人間は傲慢にも神さまを裁くという大罪を犯しておきながら、その責任を負わないという無責任極まりない態度をとってきました。それがこのピラトの行為に現れています。しかしこれはある真理を示しています。つまりこのような許されざる大罪を犯してもなおわたしたちが責任を取らずに済むのはこの罪の責任をキリストが負ってくださったからに他なりません。無責任にも簡単に人を断罪し、終いには神さまをも十字架につけて裁く、そのわたしたちの罪をキリストはすべて担われ、あの十字架で死んでくださいました。このキリストゆえにわたしたちは潔白であるのです。完全な道とはわたしたちが作る完全な道ではありません。キリストによって贖われ、御前に赦されたところに成り立つ完全です。そういう道を神さまは備えてくださった。その恵みをここで覚えましょう。

その時に、わたしたちは軽率に人を断罪するような過ちから救われるでしょう。神さまは御子の命をもってわたしたちの罪を赦し正しいとくださるお方なのでありますから。またたとえわれのないことで悪口を言われても、誰からも理解されなくても無理に反論したり、弁解する必要もないのです。神さまがわたしの潔白を知ってください。キリストがわたしの弁護者である。それで十分なのです。

天の父よ。わたしたちはあなたの裁きに耐えることはできません。ただあなたの完全な道の中に立たせてください。誰からも理解されなくても、身に覚えのないことで悪口を浴びせられても、キリストゆえにあなたに潔白であると認められることを幸いとすることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。